

## 養成段階において家庭科授業づくりを 支援する指導用資料の検討

— 「家庭科授業がわかる・できる・みえる」 —

### Development of the teaching material for making Home Economics lesson in teacher education: An Evidence-based Practice

高 木 幸 子

Sachiko TAKAGI

#### 1. 問題意識と目的

教師は職務として様々な用務を行っているが、中でも勤務時間の多くを費やしているのが授業実践である。そのため、授業における子どもからの反応は、良くも悪くも教師が自分の授業を振り返る材料となる。また最近では、同僚性も注目されるようになってきており、授業を観察したり相互に批評しあったり協議したりできる機会が増える傾向がみられる。このような機会を多くもつことは、教師にとっては自分自身の授業実践について省察を通じて課題を認識し、授業改善を行う契機につながることから望ましい傾向であると理解できる。

しかし、家庭科教師を取り巻く環境は依然として厳しい状況である。それは、小・中・高等学校における家庭科（中学校は技術・家庭科）の授業時間数の減少により、規模の小さい学校での家庭科担当教員の未配置や非常勤講師による複数校兼務での授業運営といった状況に端的に表れている。また、そうではなくとも一般的に学校の中で家庭科を主担当している教員は1名ないし少数である。そのため、日常的な相談や協議を通じて研鑽する機会を持ちにくいことが共通の課題となっている。

上述した状況や課題を踏まえると、家庭科教員となる学生に対しては、養成段階においてより実践的な場面を設定し、授業実践に至る準備や留意点、状況に応じた判断や授業についての省察など、授業準備や運営にかかわる基本的な方法を理解できる経験が必要であると考えられる。このような課題意識を基に、筆者は2004年度から家庭科授業の理解や授業実践力の向上のために家庭科教育法プログラムの内容や構造、指導の際の留意点などを検討し、プログラムの検討・改善をすすめてきた。この取り組みを通じて、学生が家庭科授業を準備・運営できるようになるために、家庭科授業が「わかること」、「できること」、「みえること」が必要であることを知見として得てきた。また、今後も家庭科授業を準備・運営することについて効果的な指導のありようを検討していくためには、現在試行しているプログラムの内容や構造だけでなく、すすめるうえでの要点や留意点などについても指導用資料として明示化し、筆者自身が使用する立場から見直すことが必要であると考えた。

本報では、以上の認識をもとに、これまでの取り組みで得られている知見に基づき、試作した指導用資料について報告する。

#### 2. 指導用資料作成の基になった授業科目

本報告で紹介する指導用資料を作成するに当たっ

ては、中等家庭科教育法Ⅱ～Ⅳ（中学校・高等学校家庭科教員の免許取得にかかわる教職科目）の3科目を対象として検討をすすめてきた。

これらは、家庭科専修・生活科学コースの学生を主対象として、第2年次の後期～3年次の後期に行っている。他の教科専門をもつ学生も少数ではあるが履修しているものである。

なお、3つのプログラムは、授業科目名は上述の通りであるが、実践内容の違いを明らかにするために、本報では、中等家庭科教育法Ⅱを「家庭科理解プログラム」、中等家庭科教育法Ⅲを「授業力向上プログラム」、中等家庭科教育法Ⅳを「家庭科評価プログラム」と記すこととする。

### 3. 作成した指導用資料の構成

作成した指導用資料は、家庭科授業が「わかる」こと、「できる」こと、「みえる」ことをめざす3つのプログラムとしてまとめた。その際、各プログラムのねらいやプログラム内容に関して筆者が特に留意した点については、各プログラムの内容に入る前提としてまとめ示した（資料1、資料2）。

また、各プログラムの部分では、最初に、プログラムの全体像を示すとともに、目標、学習内容・活動の手順および実施する際の留意点を示した。また、学生がどのように学ぶのかわかるように、学生に配布したワークシートやこれまでの取り組みの中で学生が作成した資料なども参考資料として掲載している。

### 4. プログラムを構成する体験活動とPDCAサイクル構造

学校教育における家庭科は、家庭生活や地域の生活に関する基本的な知識や技能を実践的・体験的な活動を通して習得するとともに、それらをもとにしてよりよい生活に向かう判断や働きかけのできる態度を育てることを志向して進められている。したがって、家庭科授業を運営する教員は、具体的な活動を考え、どのような実践的・体験的な活動を組み込むことがよいのかを判断できることが必要である。そのように考えると、教師自身が体験そのものの価値を理解するだけでなく、子どもから気付きや学びをひきだせる授業構成を考えられるようになることが必要である。言い換えれば、家庭科教師には、体験活動を指導過程の中に組み込んだ授業を構想・実践

できるようになることが求められているといえる。

そのため、開発した3プログラムには、学生参加型の体験活動を取り入れるとともに、課題意識の醸成や体験活動を通じてその意味を学習できるよう、省察の場面を位置付けたPDCAサイクル構造を組み込んで構成している。これら3つのプログラムに含んでいる主な活動をPDCAサイクル構造に重ねて示したのが図1である。

なお、PDCAサイクルは、品質管理の父といわれるW・エドワーズ・デミングやW・A・シュハートらが、生産プロセスの中で改良や改善を必要とする部分を特定・変更できるようにプロセスを測定・分析し、それを継続的に行うために改善プロセスとして連続的なフィードバックループとなるように提案したものである。そして、計画(Plan)、実行(Do)、評価(Check)、改善(Act)のプロセスを順に実施するサイクルであり(デミング1996など)、学校教育においても、授業研究や課題解決的な学習活動場面を推進する構造として用いられているものである。

### 5. 各プログラムの内容と指導上の要点

#### (1) 家庭科理解プログラムの概要

家庭科理解プログラムは家庭科授業の内容や指導上の特徴の理解を意図して準備したプログラムである。その手順や内容を示したマニュアルの一部を資料3、資料4に示す。

この部分では、家庭科授業にみられる特徴として、教科内容や指導方法の特徴と考えられる4視点を設定している。それらは、家庭科授業の内容としての特徴といえる「視点A：社会変化への対応」と「視点B：よりよい生活実現」である。また、指導方法の特徴である「視点C：実践的・体験的な活動」の適切な位置付けを考える視点も加えた。さらに、本プログラムは2年次後期に行っていることから、教育実習などで、実際に授業の計画や準備を経験していない学生が主な対象である。このことを踏まえ、「視点D：生徒の思考と教師の意図の関係」についても理解すべき視点として加えている(資料3：I-1)。

本プログラムではこれら4視点を理解を図るための、共通テーマを「平等」とし、共生の立場から思考することを求める活動を導入し検討してきた。

家庭科理解プログラムの内容として共生の視点を重視したのは、家庭科という教科が社会の変化に対

応することを求められてきたこと、家庭科を学ぶ際に、学習者の視座を「生活者」におく点と関連している。

たとえば、健常者にとっては問題にならない通路も、高齢者や子ども連れの妊婦、車いすを必要とする人にとっては不便と感ずることがある。こういった現実に関わり、自分や自分の暮らしを大切にすることと同じように自分以外の人やその人の生活をも大切にできるようになることは、すなわち、私たちの暮らし全体をよりよくすることにつながる。こういった共生の視点は、平成20年に改訂された高等学校家庭科の学習指導要領でも新たな学習の視点として加えられており、家庭科教師をめざす学生にとって持つべき重要な視点の一つであるといえる。

プログラムの中では、体験を通じて気づきを生む人的・物的環境を想定してコース設計する活動や、体験後の省察を通じて得られる気づきを共有する活動を組み込んでいる。

また、男女平等や子育てなどの視点から「平等について子どもが考えることのできる授業」をテーマとして学生が自分の考えを述べあうディベートの機会や授業を具体的に構想し、指導計画を作成して報告し合う活動を組み込んでいる（資料4：[I-2]）。

これまでの実践を通して、家庭科理解プログラムに関していくつかの知見を得てきている。たとえば、不平等な環境に気づけるコースの設定を行った部分の省察や学生の構想した授業の分析からは、社会の変化への対応の視点（視点A）、実践的・体験的な

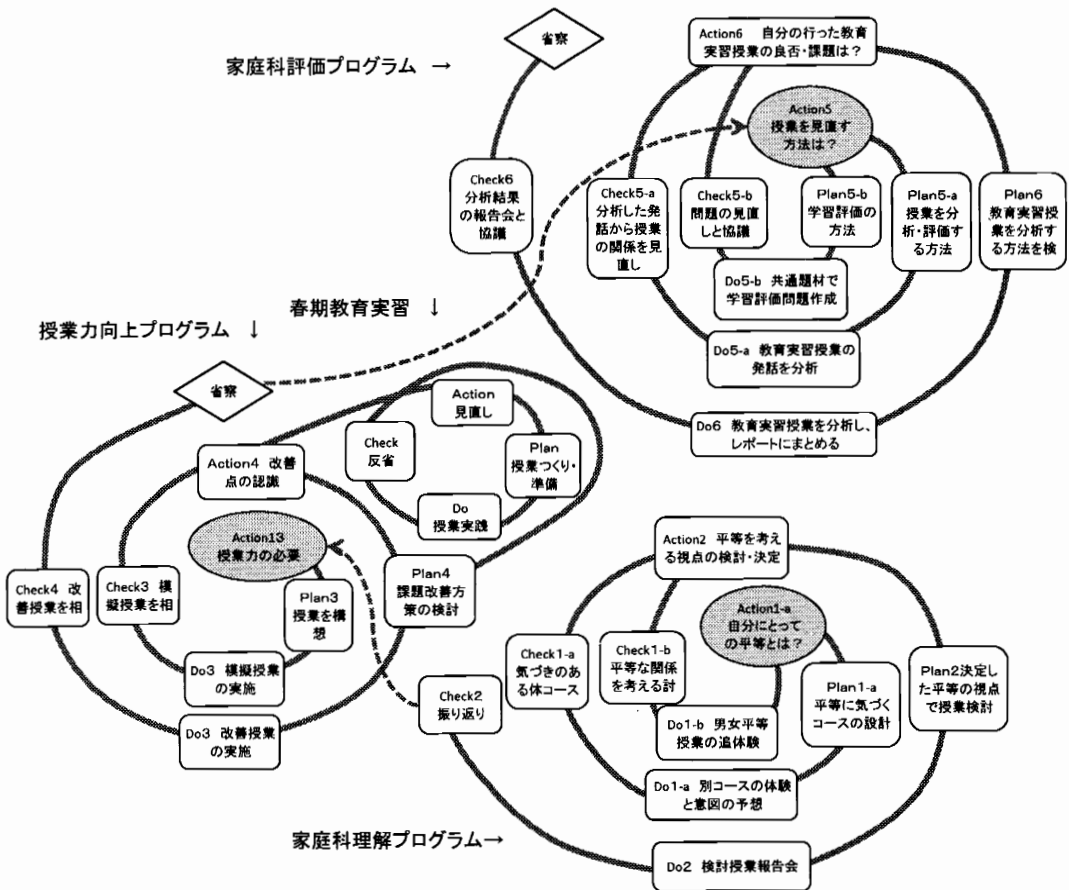


図1 家庭科授業を学ぶための3プログラムのPDCA構造

学習活動の位置付け(視点C)、生徒の思考と教師の意図の関係(視点D)については、学生はその必要性や重要性に気づけていたと推察できたこと。一方、実生活への結びつきの視点(視点B)は、他の視点よりも実現状況が低い結果であったことなどである。実現状況が低かった要因について、学生の取り組む様子から推察すると、学生は視点を理解できていないわけではなく授業の形に実現する力が不足していることによると思われる。むしろ、本プログラムの構造そのものに視点Bを理解させる仕組みが弱かったことが要因と考えられた(高木2009a)ことから、次年度の実践では、上述したコース設計と体験を行う活動の場面で、大学構内にある生協の中で実際に買い物をしていただいたりするなど、より現実の生活場面に近づけるように改善した。指導用資料にはこの点を改善した活動で構成している。

以上、本プログラムの検討を通じて、教科の特徴を理解するためには、教科固有の内容や特徴的な指導方法などを精練し設定することが重要であることが分かった。

家庭科の場合は、家庭生活や日常生活の諸事象と密接に関連した内容を扱う教科である。そのため、学習を通して身に付けた知識や技能を自分の生活に生かすことや、よりよく改善するために、何を重要と考えるのかといった判断に向き合う機会が欠かせない。本プログラムの実践でも、教科を超えて重視すべき基本的な教授スキルや基礎となる知識や技術の習得と重ねながら、家庭科授業の特徴がプログラムの内容や構造に反映されるよう検討を重ねてきた。

このような意図をもって家庭科理解プログラムをすすめたところ、学生はとまどいをみせながらも、日常生活では見過ごしていた諸事象(たとえば、教育学部のエレベータドアの開閉速度は速く、車いすに乗って使用する場合、一人では対応が難しいことなど)に気づき自分の身近な生活を共生の視点で見直す機会を得ていた。体験活動を通じて自分をその中において実感を伴って考える経験を重ねることは、上述している家庭科という教科の本質(体験そのものの価値を理解すること、多様な視点から価値を吟味すること)に近づく経験であったと考える。

## (2) 授業力向上プログラムの概要

授業力向上プログラムは、家庭科授業を構想し、準備し展開できる力の育成を目的としてすすめてきたものである。

そのために組み込んだ中心的な体験活動は2回の

模擬授業を行う活動である。最初の模擬授業は家庭科授業を構想・準備・実践する経験を重視し、2回目の模擬授業(改善授業)は最初に行った模擬授業で認識した改善すべき課題の改善を目的とすすめる活動である。中でも、この2回の模擬授業の取り組みの質を左右するのが、最初の模擬授業を行った後に行う相互評価とその記述されたコメントをもとに課題を見出すために協議する活動である。

これまでの実践から、模擬授業の経験は、指示・発問や生徒対応の難しさを実感し、授業をすすめる際には目標設定が曖昧だと授業が流れていかないことや、そのようにならないために指導過程を十分に吟味しておく必要があることに気付く契機となっていることがわかった(高木2007a)。一方で、2回目の模擬授業後の協議の場面では、改善すべきと指摘された課題や学生自身が認識した内容については改善の成否が協議されたが、よりよい授業とするためにアイデアを提案する様子や、全体の視点から一つの授業を総合的に検討しあう様子はほとんどみられなかった(高木2007b)。

この課題については、家庭科授業をどのようにみるかといった点について共通の理解を図れおらず、協議が深まらない要因になっていると思われる。そこで、達成すべき目標を提示してプログラムをすすめるように改善したところ、模擬授業で改善すべきと認識する課題と改善授業において改善されたと認められた内容との整合が良くなることが確認できた(高木2007c)。

また、模擬授業後に行った自己評価の記述内容は授業者が取り組んできた内容に偏る傾向がみられること、一方、相互評価は自己評価にみられる記述内容の偏りを是正していることが知見として得られている。このことから、指導用資料では、授業後の評価は相互評価を用いてすすめることがよいと考える。

他方、授業力向上プログラムの実施期間中には春期教育実習期間が含まれている。そこで、これまでの実践の中で、教育実習の事前指導として学生が取り組む内容と本プログラムで行う内容について相互に関連するように調整してすすめてきた。具体的には、本プログラムでは、2-3名でグループを構成し、学習題材を自由にして、学生の考えやアイデアが出し合えるように授業づくりをすすめた。それに対して、教育実習の事前指導では、学生が教育実習で担当する分野・内容を事前に聞き取りさせておき、その題材(内容)について各自が準備を兼ねてすすめるようにした。

教育実習後に、教育実習の事前指導の内容と本プログラムの内容について、扱う題材や取り組む人数（グループか一人か）は変え、考える内容については連携させた点について学生に尋ねた。その結果、教育実習前に行う本プログラムでの模擬授業の経験は、子どもを前にして実際に行う授業に必要な基本的な準備や作業を理解する役割を果たしていることがわかった。また、教育実習の経験は、教育実習後に行う改善授業を検討する際に、子どもの反応を具体的にイメージする支援となっていることも確認できた（高木2009b）。このように、教育実習の事前指導の内容と連携させることは学生にとってもプラスになることが確認できたことから、指導用資料においても、上述の2つの内容は連携させる構成としている。

以上の実践で得た知見を踏まえ、指導用資料の中を含む内容としては、2回の模擬授業を組み込み、授業を行う経験と課題を見出し改善に取り組む経験を含むようにする。そして、初めて行う模擬授業に対しては相互評価を行い、2回目の改善をめざした模擬授業に対しては相互評価として改善状況を確認するだけでなく協議する時間をとってそれぞれのグループが考えた授業をもとによりよい授業にするための方策を検討しあえるようにする（資料5：Ⅱ-1）。

また、プログラムの最初の段階で、身につけたい力を意識して取り組めるように目標を指標として提示する（資料6：Ⅱ-2）。この指標は、プログラム全体を通じて意識させることが重要で、模擬授業を評価する際の評価の観点でもあり、その後、課題を分析する際に整理する枠組みとしても使用する。

さらに、模擬授業の良い点や課題をお互いに指摘し合うとともに、指摘された内容を改善方策の材料とできるようにすることが重要である（資料7：Ⅱ-4）。具体的には、最初の模擬授業場面では、授業者も授業を受けた学生も、一授業ごとに評価を行う（資料8：参考資料）。その際には、気付いた内容を付箋紙に書き、それを準備された川紙に貼るようにする。このように付箋紙を用いて記述させるのは、授業を振り返って課題を見出す次の場面で、授業を行ったグループが、記述された指摘から共通する課題を分析する際に、付箋紙を自在に動かしながら整理できるようにするためである（資料9：Ⅱ-5、資料10：参考資料）。

### (3) 家庭科評価プログラムの概要

家庭科評価プログラムは、家庭科授業にかかわる評価の方法を理解することを目的としてすすめているものである。家庭科授業にかかわる評価としては、子どもの学習状況を把握するための評価と、教師自身が行った授業の良否を見直すことにつながる評価の両方について組み込むことが必要であると考えている（資料11：Ⅲ-1）。

子どもの学習評価に関しては、これまでに経験がないことから、共通の授業実践事例を題材として与え、基本的な学習評価方法や内容の説明と共に評価問題の作成や内容の吟味ができるようにする。扱う題材については、授業の流れや子どもに用いたワークシート、あるいは授業風景などの記録を視聴できるような、授業場面の様子が具体的に想像できるものが必要である。ここでは、筆者自身の実践でもある事例を扱っている（資料12：Ⅲ-4）。

子どもの学習評価について留意すべき点は、形成的評価に焦点を当てて問題作成の活動を行うことである。授業を展開する中で、教師が子どもにどのようにかかわるか学習理解の状況を左右する重要事項である。そのため、より適切な対応を行うためには、教師が子どもの状況を的確にとらえることが必要であり、それは言い換えれば子どもの学習状況を評価する活動に他ならない。しかしながら、本プログラムが対象とする学生に評価問題を作成した経験はない。そこで、提供する事例についての十分な解説とともに授業場面を中心として行われている主な評価方法を説明し、実際に問題を作成する活動を組み入れる（資料13：参考資料）。また、結果としての評価ではなくプロセスとしての評価活動の重要性を理解できるよう、学生が作成した問題を素材として問題の良否や授業場面での評価結果の活用について、具体的なフィードバックを行う（資料14：参考資料）。学習する内容は同じでも、子どもの理解の状況を評価する目的や場面によって様々な方法を用いることができることを学べるようにすることが重要である。

授業者自身の振り返りにつながる授業評価については、将来、自分の授業を分析するために必要な基本的な方法を理解し活用できるようにすることを意図している。そのため、基本的な分析に用いる方法を説明し理解を促すのちに行う演習では、学生が3年次の春期教育実習で行った自分の授業を分析する活動を行う（資料15：Ⅲ-6）。自分で授業を分析することは、自分の授業を客体化することである。

授業力向上プログラムでは、模擬授業に対する相互評価を行っているが、自分の行った授業に対する評価（自己評価）は偏る傾向が見られていた。このことを踏まえると、自分がどのくらい一生懸命授業を行ったのかを自己評価するのではなく、自分が子どもに対してどのような授業を行ったのかを分析して授業を見直す経験の方が、現実を正しくとらえ、授業改善のステップにつながるようになることと考える（資料16）。

上述している教師の授業評価について留意すべきは、代表的な授業分析の方法や手順について、学生の段階でもできるように分かりやすい枠組みを設定し授業を省察することの意義を経験的に理解できるようにしておくことであると考えられる。本授業の中だけで一般に用いられている分析方法の全てを説明し、それらの枠組みを用いて演習を行うことは、時間的な確保の面で難しいと考える。しかし、教師をめざす学生であれば、将来、教師になったのちに自分の授業を省察する機会が必要になることも考えられる。また、そういった機会の有無にかかわらず、自分の授業を反省的に見直す姿勢と方法をもっておくことが、自分自身の授業を高めていくためには必要なことである。

学生や初任教師のうちには、自分が気付かなくとも（できなくとも）指導教員や周りの指導を受け持つ教員の助けを借りて、多くの場合は、改善のサイクルののっとなって授業はよりよくなっていくことが期待できる。しかし、一方で、授業改善に向かうかどうかは、授業の課題をどのようにとらえるかによって違いが表れることも予想できる。このように考えると、養成段階の学生にとってはなじみが薄く難しい内容かもしれないが、自分の授業を分析的に振り返る力をつける方法を学ぶことは重要であると考えられる。

## 6. まとめと課題

以上、2004年度から取り組んでいる中等家庭科教育法Ⅱ～Ⅳの内容や構造の検討を踏まえ、試作した指導者用資料について報告した。

試作した指導者用資料の一部は、学生用のワークシートとして編集し直し、収録した内容や説明の方法などについて検討を続けているところである。

教師をめざす学生にとって授業場面での指導力を付けることの重要性は多く指摘されている。本報告では、家庭科という一教科での授業実践のありようを中心に検討し論じてきたが、その中には、教科を超えて共通の重要事項としてまとめられる内容も含まれている。今後、実施される教職実践演習の内容や方法との関連も含めて、家庭科教師をめざす学生にとってよりよい内容や指導方法を含むプログラムや資料となるよう検討が必要である。

## 参考文献

- ドミニコ・レポール, オデッド・コーエン著, 三本木亮訳 (2005) 『二大博士から経営を学ぶ—デミングの知恵, ゴールドラットの理論』, 生産性出版, 233-278
- 高木幸子 (2007a) 家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討 (第1報): 模擬授業実践から学生が学ぶ内容の分析と課題. 日本家庭科教育学会誌, 49(4). 256-267
- 高木幸子 (2007b) 家庭科教員養成における模擬授業を取り入れた教育法プログラムの検討 (第2報): 学生が認識した課題の改善への取組と改善状況. 日本家庭科教育学会誌, 49(4). 268-278
- 高木幸子 (2007c) 目標の提示による家庭科授業に対する評価内容の変容. 新潟大学教育人間科学部紀要, 10(1). 人文・社会科学編. 49-56
- 高木幸子 (2009a) 授業構造に着目した家庭科教員養成プログラムの開発. 家庭科教育学会誌, 51(4). 291-301
- 高木幸子 (2009b) 教育実習とつないで授業実践に必要な知識技術の理解を深める実践参加型授業の試み. 大学教育研究年報, 13. 新潟大学, 大学教育開発研究センター編. 9-12
- W. Edward Deming (1994) *The New Economics, for Industry, Government, Education*, The MIT press, 131-133
- W.エドワード・デミング著, N T T データ通信品質管理研究会訳 (1996) デミング博士の新経営システム論—産業, 行政, 教育のために, N T T 出版, 139-174

はじめに

本指導用資料は、教員養成段階の学生が教科指導にかかわる基本的な教授技術を習得し、将来にわたって授業実践の力量を向上していくための支援となる内容と方法の提案である。  
 この中には大きく3つのプログラムを進めるための方法と内容を示している。また、具体的な取組の概要を理解しやすするために、授業用ワークシート例や学生の記入例をできるだけ多く掲載し、プログラム作成・運営上の留意点についてはポイントとして示した。

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・ p.1

内容構成の考え方・・・・・・・・・・・・・ p.2

Ⅰ：授業が分かる・・・・・・・・・・・・・ p.3

1 目標

2 プログラム作成上の留意点

3 手順

4 実践例 (家庭科)

Ⅱ：授業ができる・・・・・・・・・・・・・ p.5

1 目標

2 プログラムの流れと内容

3 手順

Ⅲ：授業がみえる・・・・・・・・・・・・・ p.19

1 目標

2 プログラムの流れと内容

3 手順

4 実践例 (家庭科)

内容構成の考え方

本指導用資料は次のねらいをもつ3つの内容で構成している。

Ⅰ：授業が分かる	授業を支援する前提として、それぞれの固有の教科の内容や指導方法の特徴を理解すること。
Ⅱ：授業ができる	ある一つの授業を実践し、模倣授業として準備・実践から省察・改善への一連のシステムを体験することを通して、授業実践に必要な基礎・基本的な教授技術を身につけること。
Ⅲ：授業がみえる	実践された授業を、子どもの学習成果の視点と自己の授業力向上の視点から客観的に分析する力をつけること。

上述したねらいを達成するために、掲載した3つのプログラムは、特に以下の点を重視している。

- Point 1 学生が自ら参加し、体験を進んで考えを確かめを重視する。
- Point 2 体験を振り返る場を設定し、省察を重視する。
- Point 3 学生が教える側と学ぶ側の両方に立ち考えることを重視する。

また、それぞれのプログラムの内容を決定するに当たっては、次の点に留意している。

Ⅰ：「授業が分かる」プログラム

- 職務の中核は授業実践であること。
- 教師の力量形成にとって、教科指導の力量は不可欠であること。  
 なお、小学校教諭を志望する場合も、専門性のある教員が求められていることから、中・高等学校教員と同様に何かの専門教科を中心とすることが可能である(望ましい)と判断した。

Ⅱ：「授業ができる」プログラム

- 授業実践の中での子どもの児童生徒への働きかけは、学習状況の良否に直接影響を与えること。
- 教師として採用された段階で、授業を行える基本的教授技術の習得が求められていること。

Ⅲ：「授業がみえる」プログラム

- 児童生徒への責任として、学習目標達成の状況分析する力量が必要であること。
- 職業として教師を続けることを前提とすると、自己の授業実践の力量を高める方を理解することが不可欠であること。

資料1 指導用資料の全体目次 (p.1)

資料2 指導用資料全体の内容構成の考え方 (p.2)

**I: 授業が分かる**

- 1 **目標**
  - ・ 教科の特徴(内容や指導方法等の特徴)を理解する。
  - ・ 当該教科の学び方について、その代表的な方法の意義を体験的に理解する。
- 2 **プログラム作成上の留意点**

**Point:**  
・ 指導者の側で、学生に理解させるべき教科(時間)の学習内容や指導方法の特徴を分析して明らかにしておくことが必要である。  
・ 分析により明らかにした当該教科の特徴といえる内容や方法は、学生が学ぶ学習内容と学生が学ぶ方法としてプログラムに組み込む。  
・ すなわち、児童生徒に教える必要がある未習の内容(教科の固有性)にかかわる読みや内容)と指導方法について、学習者と授業者双方の立場を体験的に学ぶプログラムとすることがポイントである。
- 3 **手順**

当該教科の内容や方法の特徴を分析する。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ I-1

特徴的な内容や方法を体系的に学べるプログラムを構成する。・・・・・・ I-2

その際、授業者と学習者の両方の立場を体験する場面を組み込む。★

学習者の理解の状況や評価する規準・基準を設定する。・・・・・・ I-3

学習後に、気づきを整理する場を設定する。・・・・・・・・・ ★★
- 4 **実践例(家庭科)**

I-1 内容と方法の特徴を分析する

たとえば、「家庭科」の場合、内容と方法の特徴は次のようにまとめることができる。

理解すべき視点	理由
視点 A 「社会変化への対応」	家庭科は、現実の家庭生活や家族関係を学習対象としている教科であり、社会からの要請にこたえることを求められる。
視点 B 「実生活への結び付き」	家庭科は、現実の家庭生活や家族関係を学習対象としており、そのため、学習した成果を実生活に還元することが求められる。
視点 C 「実践的・体験的な活動」	家庭科授業では、実践的な活動としてふさわしい内容と活動を授業の中に組み込む際の留意点として理解することが求められる。
視点 D 「教師と生徒の立場の両方に立つ」	児童生徒にとって学びのある授業を構築するために、教師の意向と生徒の立場から内容や方法の良否を吟味することが必要である。

資料3 指導用資料(家庭科理解プログラム)の一部 (p.3)

**I-2** 特徴的な内容や方法を体系的に学べるプログラムを構成する  
 これらの家庭的特徴的な内容や方法を組み込んで構成したプログラムが、以下の流れである。「社会変化への対応」は、学生が学ぶ少子高齢化、男女共同参画などの内容として含み、「実生活への結びつき」は、学習場面の設定に反映した。

内容分類	教師の立場 プログラムの流れ	生徒の立場	各部分のねらい
第一の内容	学習者の関心や関わり合いを促す。 ★	平等な関係について、自分の考えを整理する。 ★★	・学習者である学生が平等な関係についてどのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること
第二の内容	自分の関心や関わり合いを整理し、自分の考えを整理する。 ★★	他のグループが設計したコースの意義や考えを整理する。 ★★	・平等な関係について、どのようか捉えているかを整理すること ・学生自身が人的な関係としてどのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること
第三の内容	平等な関係は、お互いに認め合い、お互いを尊重し、お互いを尊重する。 ★★	男女の関係について、自分の考えを整理する。 ★★	・平等な関係について、どのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること ・男女自身が人的な関係としてどのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること
第四の内容	平等な関係は、お互いに認め合い、お互いを尊重し、お互いを尊重する。 ★★	平等な関係について、自分の考えを整理する。 ★★	・平等な関係について、どのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること ・男女自身が人的な関係としてどのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること
第五の内容	平等な関係は、お互いに認め合い、お互いを尊重し、お互いを尊重する。 ★★	平等な関係について、自分の考えを整理する。 ★★	・平等な関係について、どのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること ・男女自身が人的な関係としてどのようか捉えているかを整理し、自分の中にある枠組みを整理すること

グループ1「学生の関心や関わり合い」によるグループ  
 グループ2「学生の関心や関わり合い」によるグループ  
 グループ3「学生の関心や関わり合い」によるグループ  
 一例として、教師が準備したグループ1とグループ2には、自由討論の形式をとった。

**I-3** 学習者の理解状況を評価する規準・基準を設定する  
 特徴を理解する授業プログラムの根拠はそのまま評価の観点として用い、理解状況をとらえる規準、判断基準を作成する。家庭科授業の場合は以下の通りである。

視点	A: 社会変化への対応	B: 実生活への結び付き	C: 実践的・体験的な活動
規準	現代社会の問題や変化に、学習内容を家庭生活の場面に位置づけられているようにしている。	学習内容を家庭生活の場面に位置づけられているようにしている。	学習内容を家庭生活の場面に位置づけられているようにしている。
基準	○: 目標に組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活 ○: 組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活	○: 目標に組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活	○: 目標に組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活
グループII	○: 目標に組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活	○: 目標に組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活	○: 目標に組みこまれている △: 組みこまれている生活 ×: 組みこまれている生活

資料4 指導用資料(家庭科理解プログラム)の一部 (p.4)



II：授業ができる

1 目標

- ・ 中学校、高等学校を対象とした授業作りを通して、授業実践に必要な様々な知識や技術を実践的に身に付けること。
- ・ 授業作りにおける課題を理解し、よりよい授業作りに向けて改善の方策を考え改善できること

2 プログラムの流れと内容

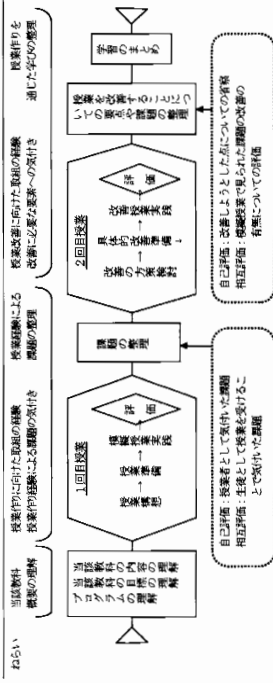
Point

授業の流れは以下のとおりである。[授業ができる]プログラムは、2回の模擬授業経験を含んでいる。1回目の経験は、実際に授業を行うことが目的である。2回目の模擬授業経験は、1回目の授業の課題を改善することが目的である。そのため、7の改善すべき課題の検討が重要となる。

3 手順

- 1 授業づくりの流れを理解する。・・・II-1
- 2 プログラムを通して習得をめざす力量を理解する。・・・II-2
- 3 模擬授業の準備を行う。・・・II-3
- 4 模擬授業を行い自己評価・相互評価を行う。・・・II-4
- 5 行った模擬授業の課題を明らかにし、改善方策を検討する。・・・II-5
- 6 改善授業を行い、授業の改善状況を確認する。・・・II-6
- 7 授業経験を振り返り、自己の経験を省察する。・・・II-7

II-1 授業づくりの流れを理解する



資料5 授業力向上プログラムの流れ (p.5)

II-2 プログラムを通して習得をめざす力量を理解する

Point

2回の模擬授業実践を通じて、どのような力をつけてほしいのかを目標として提示することで、意識化を図る。これらの目標は、授業を自己評価・相互評価する際の評価項目としてもそのまま使用し、実態的な授業の課題を検討する際のアナリシス項目とする。全体を通じて目標として提示することが重要である。

Step1 授業を構想し実践する力

授業構成にかかわる力

- 適切な(明確さ、校種)目標を設定する力
- 適切なレベルの内容を設定する力
- 目標を達成する指導過程(学習内容、学習方法)を構想する力
- 内容の適切な時間配分ができる力

教材研究にかかわる力

- 教える内容および背景となる知識や技術
- 指導過程や生徒の実態に対応したワークシートを作成する力
- 生徒の理解を支援する配布資料や教材・教具を準備する力

授業展開にかかわる力

- 教師の言葉遣いやわかりやすい説明を行う力
- わかりやすい(構造的な)板書を行う力
- 生徒への適切な働きかけ(指示・発問など)を行う力
- 生徒の発言や質問に柔軟に対応する力

当該教科を担当する教員に求められる資質能力

- 学習内容を生活に結びつける力
- 学習内容を社会に変化に対応させる力

Step2 授業実践の課題を見出し、改善の方策を考え改善する力

- 他の人の授業を見て改善すべき課題を見つけることができる力
- 課題を改善するための方法を考えられる力
- 改善する方法を実行できる力

資料6 プログラムを通じて提示した指標 (p.6)

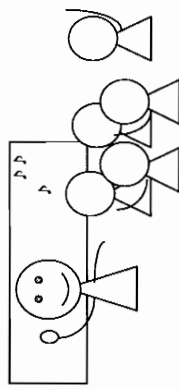
**II-4** 模擬授業を行い自己評価・相互評価を行う

**Point**

- ・模擬授業は15分間程度を実施する。
- ・授業者以外の学生は学習者として参加する。
- ・模擬授業後、自己評価・相互評価を行う。また、気づいた点は、評価用紙に直接記入せず、作業紙に書いて用紙に貼り付けるようにする。これらの作業紙は、模擬授業の課題を分析する材料となる。
- ・可能であれば、中学校や高等学校の現職の教員に授業を模擬していただき、授業のあと、指導者は、模擬授業の課題を指摘し合うことは、授業をよりよくするために必要である。
- ・なお、指導者は、自由な意見交換の場を設定することが重要である。

(1) 模擬授業実施・評価の留意点

- ・模擬授業(15分程度)を行う際は、授業をはこめる前に、学校の種類や学年、特に授業を作る上で留意した点などがあれば、簡単に説明をさせることもできる。
- ・授業者(授業グループ)は、実際に授業を行ったことで気づいた点を「よかった点」と「課題として感じた点」に分けてメモする。
- ・模擬授業終了後、授業を受けていて感じた疑問や質問ができるよう5分程度時間を設ける。
- ・1グループあたりの授業+協議+相互評価の時間は、最大30分程度必要である。



(2) 授業を評価する視点

- 授業構想に関わる力
  - 適切な目標設定/適切なレベルの内容/目標達成のための指導過程/内容の適切な時間配分
- 教材研究に関わる力
  - 教える内容と背景となる知識/ワークシート作成(内容や書きやすさ)/配布資料や教材の準備/授業展開に関わる力
- 分かりやすい言葉や説明/分かりやすい板書/生徒への働きかけ/柔軟な対応
- 家庭科教師としての力
  - 生活と学習内容をつなぐ/社会の変化への対応

資料7 自己評価、相互評価の方法の説明 (p.11)

**【参考資料】 自己評価・相互評価シート**

評価者名 □□

《模擬授業の評価》 授業班員名 ( )

1 模擬授業を見て工夫している点や気づいた点など気づいた点を具体的にメモして取りましよう。

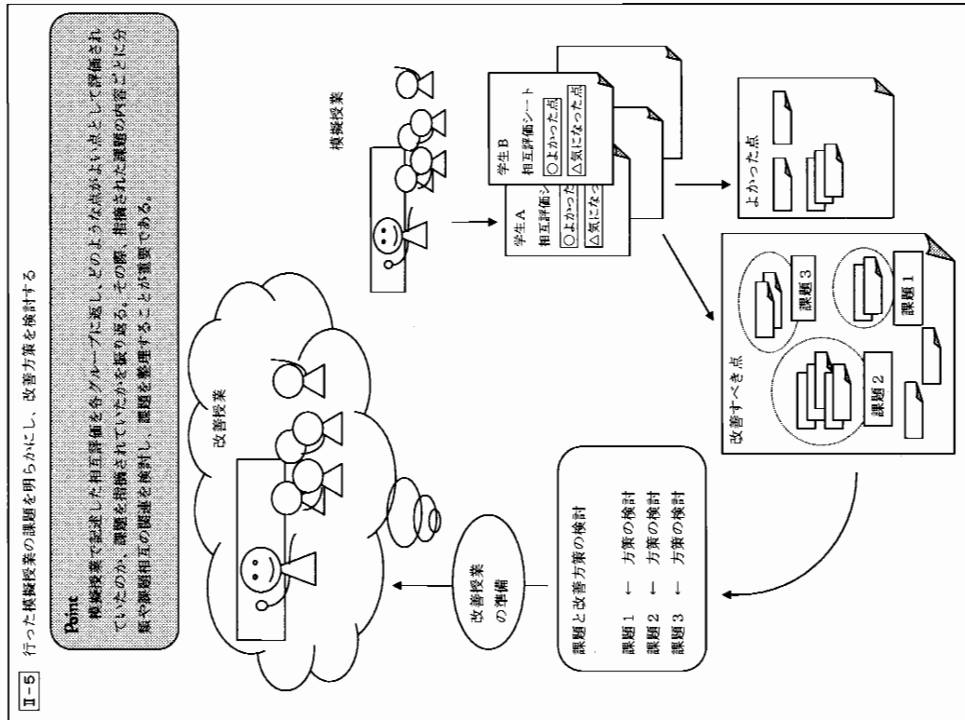
評価項目や内容	よい点・工夫している点	気になる点
授業構想に関わる力 適切な目標設定 適切なレベルの内容 目標達成のための指導過程 内容の適切な時間配分	最初の導入からの流れが自然だった。 班で話し合う時間が十分あった。 良かった。	気になる点 さらに工夫が望まれる点
教材研究に関わる力 教える内容と背景となる知識 ワークシート作成 (内容や書きやすさ) 配布資料や教材の準備	教材がたくさん準備してよかった。 「もったいない」に関する説明があった。 良かった。	絵が細かい部分があつて伝わりにくかった。 絵が小さいのも、
授業展開に関わる力 分かりやすい言葉や説明 分かりやすい板書 生徒への働きかけ 柔軟な対応	カードを書いた人を覚えていてその人を指名していた。 生徒にたくさん質問してよかった。	最後の環境のしめがおいし。 Aさんの生活から課題問題につなげるとき言葉をもう少し考えた方がよい。
家庭科教師としての力 生活と学習内容をつなぐ 社会の変化への対応		

気づいたメモは、付箋紙に記入して該当する分類に貼らせる。それは、次に学生が自分たちの授業の課題を分析する際の材料とさせるためである。

自己評価の視点  
模擬授業を行った(☆さんの記述)

うまくいった点 ...	生徒の意見をまとめて、キーワードを提示する際に、思ったものと違う意見が出てしまい、まとめられなくなってしまった。どのようにもっていくかをききさんと考えておけばよかった。
反省点	最初は副調だったが、最後にまとめきれず意味の分からない話をしてしまった。もっと、どのように進んでいくかを考えておくよと思った。
感想	

資料8 学生の記述例(自己評価、相互評価) (p.12)



資料9 模擬授業から改善授業への流れ (p.13)

**【参考資料】** 学生が分析した改善すべき課題

《模擬授業の課題分析》		授業班・班員名 (☆☆ △△)
授業項目や内容	評価目や内容	指摘された課題
授業構想に関わる力 適切な目標設定 適切なレベルの内容 目標達成の指導過程 内容の適切な時間配分	授業構想に関わる力 もったいないの 資料もあるとよい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aさんの1日の悪いところについて考えさせるのはよいがもう少し観点を絞った方がよい。</li> <li>・指示された絵だけでは、紙の大きさ、貼り方見にくくなった</li> <li>・絵が細かい部分があつて伝わりにくかった</li> <li>・絵が小さいかも</li> </ul>
教材研究に関わる力 教える書物となる知識 ワークシート作成 配布資料や教材の準備	授業展開に関わる力 分かりやすい言葉説明 分かりやすい板書 生徒への働きかけ 柔軟な対応	<p><b>課題：絵の書き方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなの起床、就寝時間を明いてAさんの1日に行く前に、もうワンクッションあるといいと思つた。</li> <li>・起床・就寝時間の質問がもし導入に馴染まないのならこれから厳選する題材名をいつてからの方がいい。</li> </ul> <p><b>課題：展開のタイミング</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒からでなかつた答えは「他にもこんなことがある」など伝えたいほうがいいと思つた</li> <li>・Aさんの1日のよくない点を先生が確認するとき、後半の意見を流したのはいませでしょう。</li> </ul>
家庭科教師の力 生活と学習内容をつなぐ 社会化への対応	改善すべき課題として整理した内容	<p><b>課題：まとめ方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夕食について差別的なことを書いた発言に対しては、そのままではいいか？</li> </ul>

資料10 模擬授業後の相互評価を受けて分析した課題 (p.14)

**III-4** ひとつの実践事例を対象に学習状況を評価する問題を作成する

(1) 評価問題を作成するための授業理解

**Point**

ここでは、中学校の技術・家庭(家庭分野)で行われた「休養で人にやさしい住まい」の授業を対象に、どのような詳細内容や評価場面・評価方法があるかを考える。その際には、授業のねらいや授業そのものを行われたのができるだけ詳細に理解できるように前提となる。教師は、授業にかかわるワーキングシートや教材、授業風景などの資料を準備し、問題作成の前に十分に解説を行うことが重要である。

(2) 授業実践事例を理解するためのステップ

- ・学習目標は何か
- ・子どもが学習目標を達成するために、教師はどのような指導過程を構成し手立てを行っているか
- ・子どもが学習状況をどのように評価しようとしているか

(3) 家庭科の例

実践事例「休養で人にやさしい住まい方の工夫」学習構成

次	テーマ	学習のねらい・主な学習活動	教材・教具など
1	学習への導入 (1, 2時)	○課題別調査(夏季休業中)を行い住まい方について自分達の気付きをもつ ・調査結果の相互発表	相互評価用白箋紙 調査テーマ一覧
2	人とのかわり (3, 4, 5, 6時)	○住まい方の視点を確認し、弘原や高齢者のいる住まいに必要な条件を知る ・保育園での安全な住まい方の工夫観察 ・高齢者疑似体験グッズを装着した歩行	視線の高さをかえた映像、訪問保育園の平面図、高齢者疑似体験器具、体験コースの設定
3	ものや環境とのかわり (7, 8, 9時)	○清潔な住まいに関する方法を知らるとともに室内環境の整備に身近な地域環境に及ぼす影響を考える ・室内のカビや汚れを取り除く実習 ・土壌酸と溶剤を用いたモデル実験 ・ごみの正しい分別方法と問題点の検討	汚れモデル(カビ、泥、クレン、コン、薬性油、しみ)、洗剤、ブラシ、土壌液、溶剤、デンプンなどの実験装置、ごみ分別一覧表
4	問題点をとらえ解決に取り込む (10, 11, 12時)	○自分の家を安全で快適な住まいにするための問題点を検討し、改善する方法を家庭に提案し、実践する ・学習の振り返りと問題点チェック ・改善案の家庭への提案(家庭実践)	課題チェックリスト 家庭への提案及び改善記録用紙 実践(冬季休業中)記録

『生活主体を育む一歩を拓く家庭科』p.222 引用

資料12 学習評価を考える共通題材 (p.22)

**III: 授業がみえる**

1 目標

- ・一般的な評価方法と当該教科で用いられている評価方法を理解する。
- ・生徒の学習状況を評価する問題を作成し、評価の役割を理解する
- ・基本的な授業の分析手法を用いて自分の教育実習の授業を分析し課題を明らかにできる。

2 プログラムの流れと内容

**Point**

授業の流れは以下のとおりである。「授業がみえる」プログラムは、一般的な評価方法の理解を基に、教育実習の授業を対象に、学習状況の評価問題作成と授業の分析を含む。教師は、日常の職務の中で生徒の学習状況の把握を行うとともに、自分自身が行った授業をよりよくする観点から授業の見直しをすることが必要である。ここでは、これらの基本的な評価方法を経験的に学ぶ。

3 手順

- 1 プログラムの構造を理解する。………III-1
- 2 授業構成の2つの考え方を理解する。………III-2
- 3 授業と評価の関係を理解する。………III-3
- 4 ひとつの実践事例を対象に学習状況を評価する問題を作成する。………III-4
- 5 学生が作成した問題に対してフィードバックを行う。………III-5
- 6 授業を分析する方法を理解する。………III-6
- 7 教育実習で行った自分の授業を分析する。………III-7

III-1 プログラムの構造を理解する

```

graph TD
    A[III-1 プログラムの構造を理解する] --> B[III-2 授業構成の基本を理解する]
    A --> C[III-3 授業と評価の関係を理解する]
    B --> D[III-4 子どもの学習状況を評価する問題を作成する]
    C --> D
    D --> E[III-5 問題点と解決方法の検討]
    E --> F[III-6 授業を分析する方法を理解する]
    F --> G[III-7 教育実習で自分の授業を分析する]
  
```

資料11 家庭科評価プログラムの概要 (p.19)

**【参考資料】** 家庭科の授業実践事例を基に学生が作成した評価問題

( ) 内は作成した学生のイニシャル

**診断的評価として作成した問題**

1-1. 「快適で人にやさしい住まい方」とはどのような住まい方か。(S)

(1) 快適な住まい方とは？

(2) 夏の快適な住まい方

(3) 人にやさしい住まい方とは？

(4) 人にやさしい住まい方とは？

(5) 人にやさしい住まい方とは？

2-1. どのような住まいが快適で人にやさしいと考えますか？(T)

2-2. 「快適で人にやさしい住まい」とは？(K1)

2-3. 「快適」「人にやさしい住まい」と聞いておもしろい言葉はなんですか？下の枠に書いてみよう。(K2)

3. 自分がしていることで、快適で人にやさしい住まいに影響していると思うことはありますか？それはどんな暮らしで、どのようなように影響していると思いますか？(T)

4. あなたの暮らしで、どのような設備が不便だと感じているところを予想してみよう。(Y)

5. あなたの暮らしで、汚れの目立つところはどこか、生活を振り返ってみよう。(Y)

**形成的評価として作成した問題**

1. 【ごみの減量化に関する問題】

ごみを減らすためには何ができるでしょうか。(M)

市町村などの団体・集団でできる取り組みと、家庭など個人でできる取り組みのそれぞれについて、考えられることを書きなさい。

(1) 市町村などの団体・集団でできる取り組み (25点)

(2) 家庭など、個人でできる取り組み (25点)

2. ゴミの問題を少しでも少なくするために、どのような取組があると思いますか？具体的に書きましよう。(C)

**【I】【ごみ分別に関する問題】**

1. ごみを分別しよう。(S)

ア～キを分類してみよう。

ア、ペットボトル、缶、紙、新聞紙、ウ、お菓子の袋、エ、歯ブラシ、オ、ガラス製品、カ、ゴミ手袋、キ、電池

**【II】【ごみ分別に関する問題】**

2. 次のごみを収集区分に分類しましょう。(C)

ア、アルミ缶、イ、いす、ウ、運動靴、エ、鉛筆、オ、血、カ、卵のパック、キ、デジタルカメラ、ク、ペイクレ、ケ、ペーパルのびん、コ、ペットボトル、サ、缶詰、シ、冷蔵庫、ス、鉛筆、セ、牛乳パック、ソ、粘土

**3. ごみの分類とごみの処理方法を答えなさい。(S o)**

収集区分	記号
①燃やさないごみ	
②燃やさないごみ	
③有害・危険物	
④ペットボトル	
⑤プラスチック製容器包装	
⑥古紙類	

収集区分	記号
①燃やさないごみ	
②燃やさないごみ	
③有害・危険物	
④ペットボトル	
⑤プラスチック製容器包装	
⑥古紙類	

**Reflection**

たとえば、前ページに載せた学生の家庭科授業に対しては、次の支援を与えた。

同じ学習内容を対象に、診断的評価、形成的評価、総合的評価、総合的評価を考えたとき、それらはどこがどのように異なるだろうか。たとえば、Sさん作成のゴミの問題で考えてみよう。

**【ごみ分別に関する問題】**

1. ごみを分別しよう。

ア～キを分類してみよう。

ア、ペットボトル、缶、紙、新聞紙、ウ、お菓子の袋、エ、歯ブラシ、オ、ガラス製品、カ、ゴミ手袋、キ、電池

**○診断的評価**

ここでは、これから学習する学習内容についての程度の知識を単純に把握すればよい。また、問題の仕方によってどのようなゴミが分別しにくく勘違いしやすいのかを把握する。→ 2 つ目の目的が主であれば、分類する素材は多い(間違えやすい)ものを多く入れ込んでおくほうがよい。

**○形成的評価**

診断的評価で勘違いしやすい部分が見つかれば、その部分の分別の区分けや、実物を準備して実際に分けてみるなどの手だてを打ちながら学習を進めるだろうから、説明、あるいは、理由などを説明したあとに、「確認問題」といった位置づけで、準備したカードを分類するとか診断的評価で出したものをカードにしておいて確認するなど、「分類できる」と確認することを確認する機会を設定する。

単にごみを分類できるという知識はほんの一部の知識にすぎない。その後、なぜ分別が必要なのか、そのことと自分の暮らしや地域環境、地域環境とどのように結び付くのかを学習する。そう考えると形成的評価は、重要な学習課題に迫るための基礎を固める役割を果たしていると考えられる。

→ 何でもかんでも確認するのは学習の進めを妨げる。学習として考えさせたいことの基礎となる知識や技能(これだけではないですよ!)というところをしっかりと確認し、理解の状況、達成の状況が不十分であれば、補足説明や補助資料などを用いて理解、達成させておきたい。

**○総合的評価**

ゴミの学習全体に対する総合的評価を考えたとき、診断的評価で行った分別の問題(まったく同じではなく、分類の根拠は同じだが異なるようにする)とその知識を基に考えさせた内容に関する問題が準備されるといい。考えさせる問題(例：【I】、【II】Mさんの問題)は、単に希望や期待を書かせるのではなく、根拠・理由が示されるかどうか(学習した内容の知識が活用されているかどうか)で理解の深さを測るようにしたい。一方、以下の高齢者に関する学習内容などは、生徒にとっては体験していないことが前提となる学習内容であるから、「想像」から「現実」のこととしてとらえさせる必要がある。

収集区分	記号
①燃やさないごみ	
②燃やさないごみ	
③有害・危険物	
④ペットボトル	
⑤プラスチック製容器包装	
⑥古紙類	

資料13 学生の作成した学習評価問題 (p. 23)

資料14 学生の作成した問題に対するフィードバック (p. 25)

**III-6** 授業を分析するための基本的な方法を理解する

表1 社会的相互作用分析のためのカテゴリ—

教師	(1)感情を受け入れること (2)はめたり、勇気づけること (3)アイデアを受け入れたり、利用すること (4)褒めること
児童	(5)褒めること (6)批判したり、否定すること (7)批判したり、否定すること (8)先生の発言—応答 (9)先生の発言—自発性 (10)沈黙あるいは無言

(1) 発話分析  
発話をとらえる代表的な方法に、フランダーズのカテゴリ—システム (Flanders Interaction Analysis System: FIAS) がある。このシステムは、児童生徒の自主性を育てる教師発話の研究に役立つ初期の分析システムとされており、「教師の発言」について、教師の生徒に及ぼす影響を間接的影響と直接的影響に二分して7つのカテゴリ—からとらえ分析するものである(表1)。このカテゴリ—には、教師の発言にも含まれない「(10)沈黙あるいは無言」の項目が設定されている。教師の沈黙に関しては、児童生徒の意識をある重要な学習課題に集中させようとして教師が意図的に沈黙する場合もあるが、生徒の沈黙についても、教師の発言の意味が理解できずに戸惑って沈黙する場合も考えられる。このように考えると、「(10)沈黙あるいは無言」の項目の場面は、授業の文脈の中で重要な場面として位置づけられている可能性もある。しかし、会話や応答の無い部分について、観察者が主観で意味付けを行うことは危険である。

**①** 分析の枠組みと分類  
したがって、ここでは、沈黙のない分析カテゴリ—の枠組みとして、北尾ら(1994)の作成した発話分析の枠組み(教師の発話を7分類、児童生徒の発話を6分類)を用いる(表2)。

分析に当たっては、ビデオテープや録音テープなどの音源データをもとに、発話プロトコルを作成する場合もある。そのような場合には、1文が長い場合も、話の途中で内容が異なる場合もある。そのような場合は、内容が転換した部分で文章を分けそれぞれを分類する。

表2 分析に用いる枠組み(北尾)

No.	教師の発言	No.	児童生徒の発言
①	情報提示	⑧	単発応答
②	指示	⑨	複製応答
③	質問	⑩	自発的発言
④	KR	⑪	コメント
⑤	状況確認	⑫	質問
⑥	誇らし	⑬	相談
⑦	注意・叱責		

手順  
①自分の教育実習の授業を対象に、発話を聞き取り言語化したデータを準備する。  
②発話者を分類する(教師：T、生徒：S)  
③発話内容により、複数の内容は文節で区切る。  
④文節ごとに①～⑬の分類を行う。  
⑤分類が不安な場合は、相互に相談し合う。

**②** 分析したデータのまとめ方  
分析した発話データを材料として、どのようにまとめるかは、分析者のアイデア次第である。たとえば、発話内容のつながりに注目することもできるし、うまく流れなかった部分に注目して、どのような会話が行われたかを、うまくやり取りができた部分と比較することもできる。また、それらをもとに、自分の授業の進め方の特徴がみえてくるかもしれない。  
授業は教師と、子どもと教材との組み合わせで創られるものである。もし、内容がよく似た授業があったら、友だちとお互いに比べ合うことも可能である。

資料15 授業を評価する基本的な方法の一部 (p.27)

発話分析作業	メモ	氏名
項目	メモ	
題材名		
実施年月日		
授業校・学年・学級		
授業者		
授業時間(分)		
注目する分析の視点		
分析して気付いたこと (後でレポートに整理する際に参考にできるように、メモを残しておくこと。)		
授業の課題		
課題改善のアイデア		

資料16 授業分析の演習に用いるシート (p.28)